

第 8 章

金曜日

週末

イスラム世界では、金曜日がわれわれの日曜日に当たる。したがって、木曜、金曜が週末である。もつとも木曜日が半どんかどうか、というのは微妙である。なにしろ公務員は普段の日でも執務時間は二時まで、実質的には一時半には仕事が終わっているのである。このうえ半どんになったらどうなるのか、と思っていたら、やっぱり半どんになるのであった。一九八〇年代になって北イエメンでは毎週木曜日、公務員は十一時から「国民憲章勉強会」というのをやることになった。これは一種の政治教育の場である。この場では「国民憲章」解説の専門家が講師になったり、職場の中で輪読したりするらしい。実際にどの程度の参加率で、どの程度熱心に勉強しているのかは現場を見たことがないのでわからない。これは多分に、当時の南イエメンで行われていたマルクス・レーニン主義教育に対抗しようとする試みであったようだ。

しかし、とにかく確かなのは勉強会に出ようが出まいが公務員は木曜日は十一時までしか仕事をしない、ということである。民間の場合は、木曜日もいつもどおり昼にいったん店を閉めて、夕方はいつもと同じように開く。木曜の午後だからといって閉まっている店はあまり見かけない。ただ日本の商社の駐在員など外国人は木曜の午後は休むことにしている。週休二日に慣れている人たちに週休一日で済ませというのは酷である。イエメン人と外国人とどっちが働き者か、という問題を複雑にする現象ではある。



夕刻のイエメン門前ロータリー。人混みと長距離バス。

ともかく、週末はふだんと違う雰囲気である。田舎が近い人は木曜の午後には一家揃って里帰りすることも多い。昼過ぎから、旧市街イエメン門の前の長距離バス乗り場は、帰省する単身者でにぎわっている。タクシーもそれぞれの行き先によってたまり場が違うが、大きな荷物を屋根に載せて、ぎゅうぎゅう詰めになった車から順に出発していく。車を持っている者は同郷者を乗せて、やはりすし詰めでそれぞれの方向に散っていく。

夕方になるとサナアに残った人々で新市街の目抜き通りがにぎわう。木曜は日が暮れても、人出が多いのでいつもより町なかが明るいような気がする。特にジャマル通りの金スークは、ベールの下でおめかししている（にちがいない）女性たちでにぎわっている。われわれの目に触れるものはどれも同じようなカラス天狗の外見だけれど。金曜日には結婚式などの祝い事もあるので、そのための買い物に出る人も多い。

金曜日は金曜礼拝のある聖なる日であり、また結婚式の行われるうきうきする日である。最近、若い世代は一家でピクニックに出かけるといふ金曜日の新しい過ごし方を開発している。

金曜日の午前中はいつもと町の風景が違う。ほとんどの店はシャッターを下ろしていて、人々はいつともより朝寝坊である。だから金曜日の午前中は車の通りも少なく静かである。また砂ぼこりが立たないので空気がいつもより澄んでいる。空の青さも普段の日にまして深い。

金曜日の午前中からほこりを巻き上げているのは、空き地でサッカーをしているイエメン人の少年たち、そしてソフトボールのリーグ戦をしているアメリカ人と日本人と台湾人くらいなものである。

外国人たちがソフトボールのリーグ戦を終えてシャワーを浴びに家に帰るころ、町中のモスクから一週間でいちばん張り切ったアザーンが響き出す。いつもの日なら行き交う車の音や、建設中の建物の工事の音でかき消されてしまいがちな、昼（ズフル）のアザーンも、今日ばかりは澄んだ空気のなかで遠くまで響く。サナア盆地中のモスクが唱和するので、その音は盆地の東はずれのヌクム山や、南のハッダの丘、西のアイバーン山などにこだまして、異教徒が聞いていても町中が厳かな雰囲気包まれるような気がする。今週もまた、平和に金曜礼拝のときを迎えられるのは、たしかに幸せなことである。

今日ばかりは、普段忙しくてモスクでお祈りできない人（お祈りは、モスクでも、家の中

でも、道ばたでも構わない）も、いつもはお祈りなんかさぼっている人もモスクに行つて礼拝するのである。金曜礼拝にモスクに行かない人はいったいいつモスクに行くのか知れたものではない。だから金曜日の昼時、モスクの前の道は路上駐車の手で渋滞である。しかし、文句を言う人はいない。金曜日の昼にモスクの前を素通りしようなんて不心得者は、外国人だけなのだから。

中世を通じて、この金曜礼拝のときにアッラー、預言者ムハンマドの名とともに誰の名が讃えられるかでイエメンはそのとき誰の支配下にあるかが知られたのである。ダマスカスやバグダードのカリフ（イスラム帝国の教皇）の名が讃えられたときもあれば、エジプトの支配者の名だったこともあり、トルコのカリフを讃えた例もある。そして、イエメンの地元の支配者の名が読み上げられた例も数多い。しかしどこのカリフの名が讃えられたときでも、その支配は名目的なものにすぎなかった。イエメンはイスラム世界の辺境であつたから、どのカリフも本気でイエメンの国民を支配しようとはしなかつたのである。金曜礼拝で名前が唱えられればそれで満足していたものだ。

金曜礼拝に続いて説教がある。これは、宗教的な学識のある人（導師とでも言えようか）がありがたいお話を垂れるときである。たいていは、ここで人々の宗教心を鼓舞するような話が語られる。場合によっては、異教徒が増えたことに対する糾弾、政府の政策批判などもなされ

ることがある。シェラトン・ホテルのディスコを閉鎖せよという要求もこの金曜礼拝の場でしばしばアジられるという。また、なぜ今イスラム世界が世界の進歩から取り残されているのかを反省すべきだ、という説教もあるようだ。友人のムハンマドが気に入っていて、よくぼくにも聞かせてくれたのは「アポロ十三号の飛行士が初めて月を歩いたとき、月面で誰かが自分を呼ぶような声が聞こえた。しかしそのとき、彼にはそれがなんだかわからなかった。地球に戻ってきて、エジプトを旅行したとき、彼はカイロで月面で聞いたのと同じ声を聞いた。それはアザーンであった。彼はその場でイスラム教徒に改宗した。」というやつである。アッラーが月まで支配しているということがこれで実証される。それにいつも威張っているアメリカ人を改宗させたところが気持ちいいのだろう。

さて、礼拝が終われば昼食である。金曜の昼食は友人や親類を招いたり、招かれたりするところが多いので、とりわけ楽しい昼食である。そして、カートである。普段はカートをしなくても週末だけはカートをするという人は多い。女性たちも金曜には友人や親類の家に集まっておしゃべりをしたり、なかにはカートをする人もいるらしい。

アラビア語で金曜日は「ヨウム・ル・ジュマ」というが、これには「集まる日」という意味もある。金曜日は人々が集い、親睦を確かめ、情報を交換する日なのである。

結婚式

イエメンには娯楽が少ない。特に農村では映画もゲームセンターもない。若い者がデートするなんて思いもよらない。だから年に二度のイスラムのお祭り（断食明け祭と巡礼月祭）は村の最大のイベントであり、楽しみである。しかしこれは、毎年決まったときにやってくるから意外性がない。

あらかじめわかっておらず、突然訪れるイベントのほうがわくわくするのは、当然である。それが、結婚式である。結婚する本人と家族にとって重大なイベントであるのはもちろんだが、結婚式は村人たちにとっても単調な日常に「非日常」をもたらすわくわくするイベントなのである。

結婚式にもシーズンがある。これは気候や農作業の周期よりも、イスラム暦で決められるようである。一般にイスラム暦九月のラマダーン月に婚約して、イスラム暦十二月の巡礼月が終わってから結婚式をするのが望ましいという。たしかに村人の娯楽として考えるならば、二つのお祭りの間は三カ月しかないからこの間は避けて、イベントが少なくて退屈するときにやってもらうほうがありがたい。最近では革命後に生まれた子供たちが続々と婚期を迎えているので（一九六二年の革命後、乳幼児死亡率が低下した結果、現在全人口全体に占める十五歳以下の子供の割合は五〇%以上である）、シーズンになると毎週のように結婚式があることも珍しくない。

出稼ぎブーム以降は婚資の上昇と同様に結婚式自体も年々華美になってきており、ジャンビ

ーア・ダンスも派手にやるし、ふるまわれる食事やカートも贅沢なものになっている。村人の楽しみは以前にもまして大きい。

ただし、日本のように結婚式の二次会で花嫁と花婿の友人どうしが知り合って新たなカップルが誕生するというような可能性は、絶無である。男と女の結婚披露宴は別々なのだ。男たちは花婿を上座に据えて、カートを嘯み、ジャンビーア・ダンスを踊る。女たちは花嫁を上座に据えやはりカートとダンスに興じるらしい。ぼくは女性の結婚パーティーに参加したことがないので、よく知らないが女性のダンスは結構激しいステップのもので、女たちは舌を震わせごく高音の「ルルルルルル……」というはやし声というか、叫び声というか、雄叫びをあげて踊り、喜びを表現する。これは結婚式に限らず、嬉しいときのサイレンの



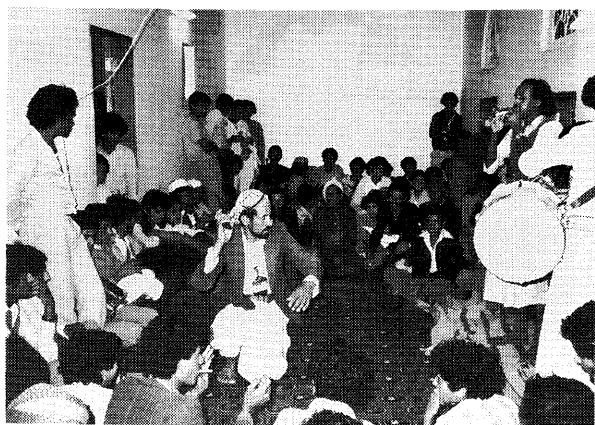
結婚式のフル・オーケストラ。左から笛、お盆たたき、太鼓。木曜の夜から金曜の昼まで雇うと3000リヤル（約4万円＝1987年）。



ジャンビーア・ダンス。地方では左肩にライフルをぶら下げて踊る人も多い。カウカバンにて。

ようなものである。これをやるのは女と決まっている。結婚式はたいいてい週末である。盛大にやるとなると数日かかるが、メインイベントは木曜日の夜（正確には日没とともにすでに金曜日になっているのだが）から金曜日の午後までである。だから、木曜の夜に町で結婚式があるときには近所一帯がお祭り騒ぎとなる。

気の早い家なら木曜の昼過ぎから、テンポの早い太鼓や笛の音が響き始める。これは、ムザイインと呼ばれる専門の楽士による演奏である。楽士は普通、太鼓たたきと笛吹き（笛といっても長さ一五センチほどの短い木の筒を二―三本束ねたような簡単なもので、音色は高音ではなく風船から空気の漏れるときのようなちよつとビリビリしたような音が出る）、それにお盆たたきの三人でフル・オーケストラを構成する。お盆たたきというのは、どこにでもある安物のブリキメッキの丸いお盆を手のひらか棒で叩いてリズムをとるのである。



室内で踊るジャンビア・ダンス。室内では少人数
ずつ踊るので、踊り手の技に注目が集まる。

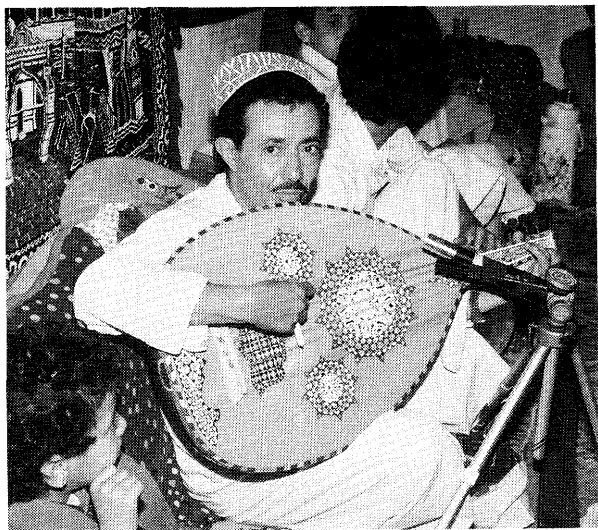
シーズンには同じ日に何カ所か同時に結婚式をする場合もあるので、楽士を確保するのが一苦勞である。生の楽士が調達できないときはカセットで代用し、ラジカセにスピーカーをつなげて演奏することになる。

結婚式のある家と前の道路一面には、裸電球が運動会の万国旗のように屋根と屋根の間にずらっとぶら下がっており、煌々と道を照らしている。町の人たちはこの裸電球の光と、楽士の打ち鳴らす太鼓と笛の音で今晚結婚式があることを知る。そしてわれわれ外国人を含めた野次馬たちが花婿の家の前に集まる。人が集まれば頃合いを見て、ジャンビアを振りかざすジャンビア・ダンスが始まる。無愛想なイエメン人だって、やはり踊りが好きである。

大勢の人が踊るときは、みんなが輪になつてく

るぐる回りながらステップしている。こういうときには、物珍しげに見ている外国人がいて「入れ、入れ」と招き入れてくれるので、誰かのジャンビアーを借りての実践練習ができる。ただぐるぐる回るだけだが、このステップは簡単ではない。ぼくは音痴なので自信がないが、どうもステップは五拍子のものが多いような気がする。

最近のサナアの結婚式ではジャンビアー・ダンスだけではあきたらず車を連ねて町なかをパレードするのが流行している。花婿の車は金銀のモールで飾りたてられ、プラスチックの造花などが屋根やボンネットに乗っている。兄弟、親族、友人たちも少し控えめに飾りたて、目拔



結婚式のウッド弾き。ライブで聞ける機会は無かった。サナア旧市街の結婚式にて。

き通りをクラクションを鳴らし、ハザード・ランプをチカチカさせながら、見せびらかすようにゆつくりと走る。車のパレードで町を一回りすると、裸電球で照らされた花婿の家に戻ってくる。

再び家の前で一わたりジャンビア・ダンスを踊ってから花婿の家に入る。ここから先は招待されたものしか入れないので野次馬は退散する。家の中に入れば、もちろんカートである。招待客もめいめい持ち寄るが、今夜は花婿の家のほうでも選りすぐりの柔らかいカートをふんだんに用意して振る舞う。花婿はきれいな衣装を着て、頭のターバンには香りの良い草を巻き付け、緊張した面もちで上座に座っている。彼は今夜はカートを嚙まない。

パーティーを豪華にするには、ここで、ウード（アラブのギター、日本の琵琶の祖先である）弾きが雇われる。ウード弾きは弾き語りで歌を歌う。最近では滅多に生のウードは聞けないので、彼の前にはマイクがセットされ、ラウドスピーカーを通じてとなり近所におすそ分けである。ウードの伴奏でもダンスが踊れる。部屋の中でのダンスは「花一もんめ」のように二三人ずつが向かい合って踊る。

真夜中近くに花嫁が車でやってくる。花婿の家の女たちは裏声「ルルルルルル……」で出迎える。花婿はジャンビアにライフルという盛装で人々のはやし言葉に送られて、花嫁と御床入りとなる。客はその後新郎新婦をほったらかして、徹夜カートの及ぶ者もいれば、家に

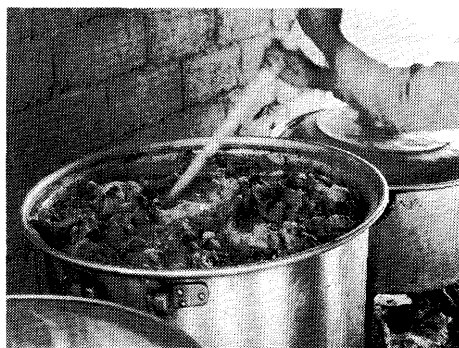


金曜日の午前中のワーディー・ダハル。人の輪の中で3人が踊っている。踊り手が少数になると踊りはクライマックスである。

帰る者もいる。

初夜が明けて金曜日の朝、再びジャンビーア・ダンスである。人々は車に分乗して、郊外の見晴らしの良い場所に踊りに行く。サナアで人気が高いのは、ワーディー・ダハルの断崖絶壁の上の石舞台である。迫力のあるジャンビーア・ダンスを見たかったら、金曜日の午前中にここに行けば、ほぼ必ずダンスを見ることができる。このときばかりは写真を撮るなど言う男はいない。

踊っているうちに金曜札拝の時刻が近づいて、人々はいったんモスクに赴く。これは通常の札拝のためであって、イエメンの結婚式ではモスクはたいした役割を果たしてはいないようだ。少なくとも花嫁と花婿が揃ってモスクで誓いを立てるといような儀式はありえない。なぜな



結婚式のための羊のスープ。屋外にかまどを作って大鍋三つで調理中。村中の人にあふるまうのである。マウル村にて。

らモスクの中は男女別々なのである。エジプトでは新郎新婦あるいはその代理人が契約書にサインをしたりするようだが、たいていの人が文盲であるイエメンにはそういう習慣もない。もちろん戸籍なんてないからどこかの役所に届け出る必要もない。

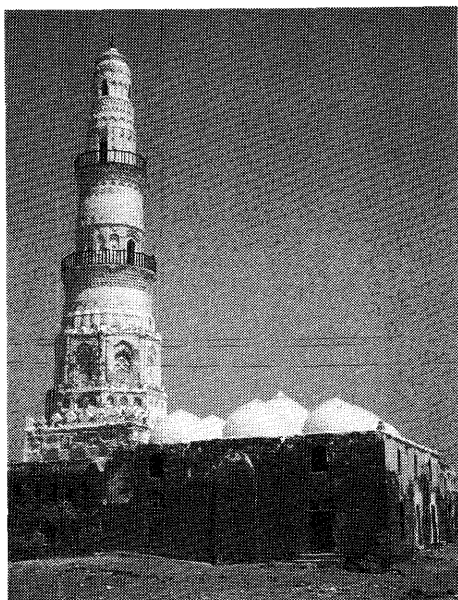
昼の礼拝が終われば、メイン・ディッシュの昼食である。田舎なら村中の女が総出で炊き出しをする。もちろん牛や羊が屠られる。牛一頭は約四〇〇リヤル、羊は一〇〇リヤル。牛を屠るのは大盤振舞である。昼ご飯が終われば、昨日に続いてカートが夕方まで繰り広げられたのち結婚パーティーはお開きとなる。

この間、閨房で何が起きているのか、残念ながらぼくは知らない。

モスク

当たり前の話だが、礼拝の場であるモスクは、イスラム教徒にとってなによりも神聖な場所である。モスクはまた、年寄りが一人でコーランを読経したり、宗教的な瞑想にふけったりする場でもあり、さらに重要な機能としては子供たちに読み書きを教える寺

する人もいる。土地から上がる作物や野菜をスークで売って、モスクの維持のためのお金が出される。時の支配者は、自らの名を冠したモスクを建立して、町に記憶をとどめようとしてきた。支配者のできることは、モスクに自分の名を冠することまでであり、所有することはで



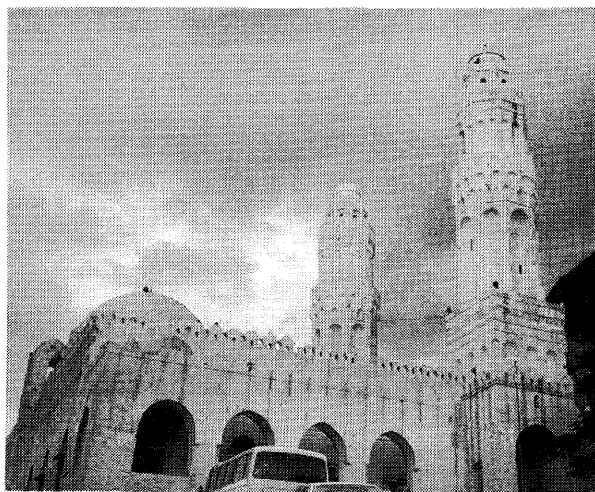
モカのアッシャズリー・モスク。コーヒー交易の栄華を見下ろしてきたミナレットである。

子屋でもあった。また、時の権力者が支配を強化する道具として用いた時代もあれば、支配者への反乱の震源地として機能した場合もある。いずれの場合も正しいイスラム、良きイスラム教徒であることが常に目指されたものであった。

どこの町でもいちばん古くて立派な建物はたいていモスクである。人々はモスクの建立や修復のために喜んでお金を出す。

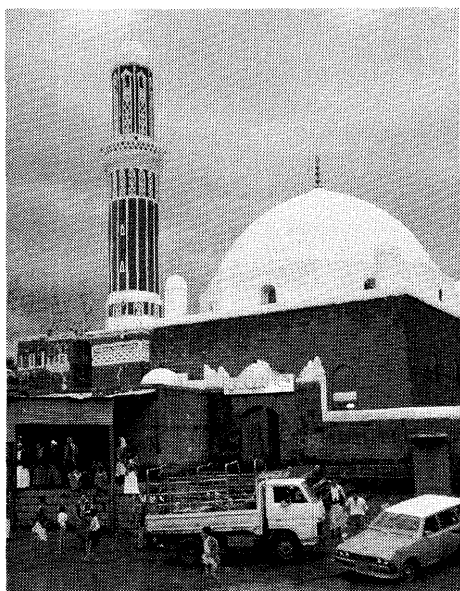
モスク維持のために土地を寄進

きない。モスクの所有者はアッラーである。イエメンには大きく分けて二つの宗派がある。一つはスンニ派（イスラム世界ではいわゆる正統派としての位置づけを与えられている）系のシャーフイー派、もう一つはシャー派系のザイーディー派である。シャーフイー派は旧北イエメンの南部、紅海沿岸地方、それに旧南イエメンで有力であった。ザイーディー派は旧北イエメンの北部、東部の砂漠地帯で有力である。人口比ではややシャーフイー派が多い。この両派はスンニとシャーとはいえ、教義上の大きな違いはないと言われており、礼拝の仕草が少し異なるだけである。サナアはもともとザイーディー派地域だが、革命後はここに南部のシャーフイー派の人たちも集まってきた



タイズのアシュラフィーヤ・モスク。双子ミナレットはイエメンでは珍しい。

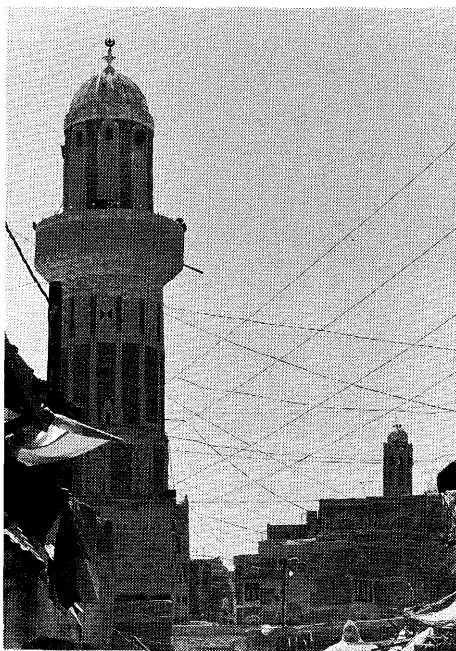
に誘う呼びかけをするためのミナレットである。ドーム型の建物のはもちろん礼拝堂である。そのてっぺんにイスラムのシンボルである三日月と星の浮き彫りがついている。普通のモスクにはミナレットとドームがつきものである。



サナアのアル・マフディー・モスク。手前のサーイラ（涸れ川）は数年に一度だけ水の流れることがあるが、普段は道路になっている。

ので、今では同じモスクで一緒に礼拝している。イスラム教徒でありさえすれば、どのモスクにも入ることができ、誰でも礼拝できる。

われわれが子供のころ「アラビアンナイト」の挿し絵などで目にしたことのあるイスラムの町並には多分、細長い塔と、上に小さな突起のあるドーム型の屋根が必ず描かれていただろう。尖塔はその最上部から肉声で礼拝の時間を告げ、人々をモスク



サナアのスークアルメルフ・モスク。電線は目障りだが、このおかげでアザーンの声をラウド・スピーカーで遠くまで届けることができるようになったのである。

由緒正しい大きなモスクには、何本ものミナレットと大小さまざまなドームが連なっている。ミナレットが高く天に突きそびえ、白く塗られた大きなドームがどっしりと構えているほど立派なモスクである。小さな村にもモスクはあるが、屋根は平屋根で、申しわけ程度の背の低い

ミナレットが立っているものも多い。普通そういうモスクは「マスジド」と呼ばれ、町の立派なモスク「ジャミーア」とは区別される。

人口が多くいくつものモスクがあるような町では、その中の一つが「大モスク」(ジャミーア・カビール)と呼ばれ、町の中心部に位置している。モスクは聖なる空間で

あり、その中で高声を発したり喧嘩をしたりしてはならない。だから、心も身体も淨めて内に入る。モスクの入口横には、礼拝のために身を淨める水場があり、礼拝する者はここで作法に従つて身体を洗う。特に性交してきた後は念入りに身体を淨めなければならない。イエメンでは女は普通モスクに入らない。入る場合でも女性専用のスペースに入り、男性からは見えないようにして礼拝する。

さて、こういうモスクに異教徒が紛れ込んでよいものだろうか。否である。モスクはイスラム教徒が真摯な心でアッラーと向き合い、またイスラム教徒どうしが団結を確かめる場である。異教徒が興味本位に写真を撮りにくる場所ではない。異教徒が礼拝堂に入るなど、汚らわしいことである。

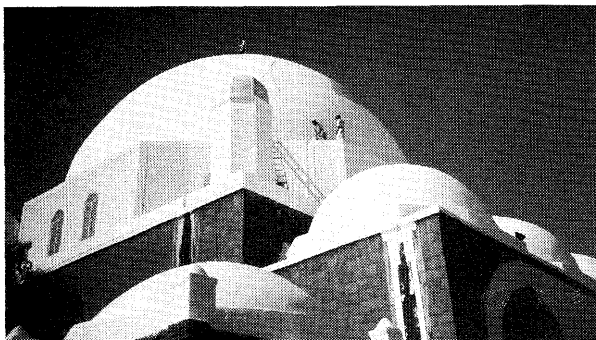
とはいえモスクは恰好の被写体である。まさにイスラムまさにアラビアという被写体である。だから、由緒正しいモスクであればあるほど、中を覗いてみたいし、写真も撮ってみたいという誘惑にかられる。東南アジアなどでは、観光スポットとして開放されている場所もあるくらいである。しかし、ここはイエメンである。アラブのなかでもとりわけ純真なイスラム教徒の国である。自分が異教徒であるという事実を自覚してから、モスクにアプローチしなければならぬ。「写真を撮りたいんですけど」と言えば、まれには「入ってもいいよ」と言われる場合もある。運よく入れるときは靴も靴下も脱ぐことを忘れないように。ただし、礼拝中は絶対

に侵入しようなどと考えないこと。特に彼らの礼拝している前を横切ったりするのは、地獄に落ちてもまだたりない行為と言うべきである。われわれがどれほどイスラムの教義がバカげていて前近代的だと思っていたとしても、またアッラーなんて屁でもないと思っていたとしても、アッラーを信じている彼らの礼拝の邪魔をする権利はどこにもない。

こそこそせずに堂々入りたいたいと思えば、イスラム教徒になればいいのである。イスラム教徒になりさえすれば、大手を振って世界中のどのモスクにも入り込める。中国だか日本だかし



サナアの大モスク（第3章88ページ参照）の大回廊の内部。コーランを読んでいる人の目は真剣である。ここでは子供たちも悪ふざけはしない。



化粧直し中のサナアのバキーリーヤ・モスク。
白い漆喰でモスクは生まれ変わったようになる。

らないが見慣れない顔つきの人間がイスラム教徒だと言
ってモスクに入れば、イエメン人たちはきつと大喜びし
てくれるだろう。アッラーの教えが地の果てまでも届い
ていることになるからである。その気になればよくだつ
て偽ってモスクに侵入できる。礼拝の仕方ならムハンマ
ドの家で彼が礼拝しているのを見よう見まねで知ってい
るから、その場をだましおおせないことはない。イエメ
ンを隅から隅まで見てみたいと思っているぼくにとつて
は、モスクに入り込むのは大きな誘惑であつた。

しかし、その場のイエメン人が素直に喜んでくれれば
くれるほど、ぼくは彼らに対してやましい気持ちを抑え
ることができなくなる。もちろん、ぼくに本当にイスラ
ム教徒になるつもりがあるなら別である。しかし、今の
ところそのつもりはない。ただモスクに潜入するだけ、
写真を撮るだけの目的で偽イスラム教徒になるのは、イ
エメン人の友人たちに対する裏切りのように思えてなら

ない。だから、ぼくはイエメンのモスクにはほとんど入ったことはない。

犠牲祭や巡礼祭、あるいは革命記念日などの前になると、ドームやミナレットの白い漆喰が新たに塗り直され、モスクの化粧直しが行われて祭りの気分が盛り上がる。定期的に漆喰を塗るのは雨水が漏らないようにという実際的な目的もあるが、青空にそびえる真っ白いミナレットの姿は本当に清楚であり、侵しがたい神聖さを感じさせるものである。そしてぼくの友人たちが大切にしているこの場に、興味本位で入り込んではいけなそうと思わせる何かがある。

イエメンのモスクは、ぼくにとっても神聖不可侵の場所である。

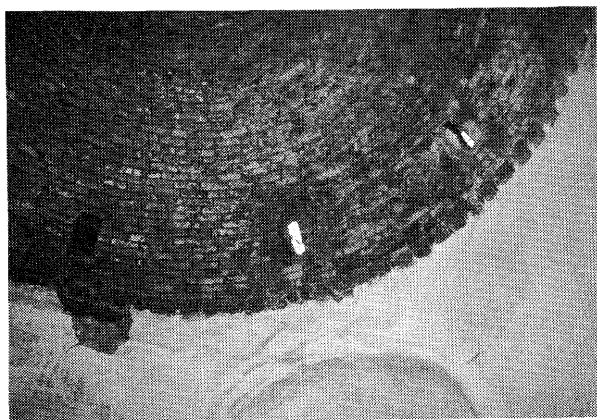
ハンマーム 札拝と金曜日の昼食を済ませたら、一つ風呂浴びるのがサナアつ子である。旧

市街では家ごとに風呂はついていない。誰もがハンマームと呼ばれる公衆浴場に出かけるのである。サナア市内では、今でも十数件のハンマームが営業している。公衆浴場といっても、日本のように湯船につかる風呂ではない。スチームバス、つまり本来の意味でのトルコ風呂である。十六世紀にオスマントルコ帝国がイエメンを支配下に置いたとき、サナアに派遣された知事とともにトルコからハンマームが移植されたらしい。

浴室は半地下の部屋で、天井はドーム状になっており明かりとりの窓がついている。外から見ると地面に直接ドームが乗っかっており、モスクが地面に沈下したように見える。浴室は床も壁もすべて石で囲まれている。この部屋の下にかまどがあつて部屋ごと加熱する仕組みである。

熱は床や壁を通して伝わり、この部屋の中に水を撒くとたちまち蒸気で蒸し風呂になるのである。

ハンマームの営業時間は夜明け前から深夜までである。そもそもなぜ、サナアにハンマームが流行ったかといえ、夜明け前へファジュルへの礼拝を行うためであつた。高原の朝は冷え込む。霜が降りることさえあるのだ、ファジュルの礼拝をさぼりたくなるのは人情である。「寒さは礼拝の敵である」という言葉もあるくらいだ。特に冬の朝一番、冷たい水で身体を淨めるのはつらい。ならば温かいお湯で身体を淨めれば、快適だし、礼拝も喜んでする気になる。一石二鳥である。というわけで奨励されたという話である。トルコ人の知事や高官たちがなんとか礼拝をさぼらないようにさせようとした知恵がもたらしたものらしい。ただし、六世紀のペルシャ帝国の占領のときに最



ハンマームの内部。ドーム状の天井には明かり取りの窓がついている。

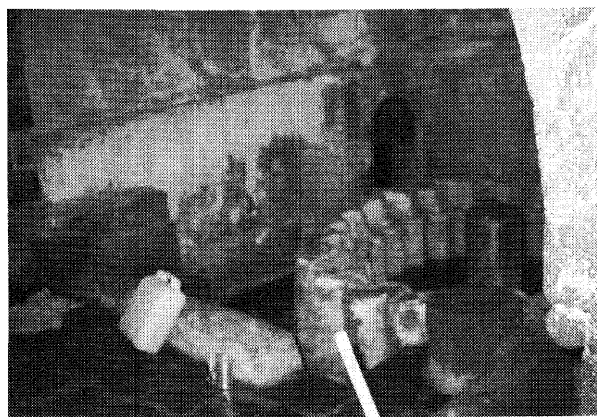
初に紹介されたという説もある。どちらにせよ、北方のかなり寒い地方に起源をもつシステムだが冬の朝の気温が氷点下にまで下がる高原都市サナアにはうってつけだったというわけだ。

ハンマームは旧市街の住宅街の中にあり、たいていはモスクに隣接している。ドーム状の屋根を持っているので、周りになにもなければ目立つはずだが、低くて表通りからは見えないようになっている場合が多いので、旧市街を歩いていてもすぐには見つけられない。ハンマームの入口は普通の家と同じように、かがんで入る程度の大きさの扉がついているだけである。日本の銭湯のように立派な入口ではない。扉を入ると狭い通路を進み、何段か階段を下りる。そこに受付と脱衣所がある。普通の家と同じように壁は白い漆喰で塗り固められているが、湯気がこもるので防水用はかなり厚く塗られている。地下なので昼間でも小さな裸電球がぶら下がっており、床にはゴザが敷いてある。腰巻一つになり、脱いだ着物は持参した布にくるんで棚に載せる。イスラム教徒はけつしてすっぽんぽんにはならない。この腰巻は入浴用に持つべきものである。

浴室内部は、ハンマームの規模によって違うが、まず洗い場に相当する部屋があり、ここで身体を洗ったり、髪を洗ったりする（二五七ページ図の▽印）。この部屋には日本の「三助」さんに当たる人がいて、「キース」と呼ばれる袋状の垢こすりの道具を持っており、身体を洗ってくれる。試しにこすってもらったら、あつという間に黒い大きな垢の塊ができあがってシヨ



ハンマームの外観。左のブリキの箱は水タンク。手前のドラム缶は燃料用の重油である。サナアのハンマーム・シュクル。



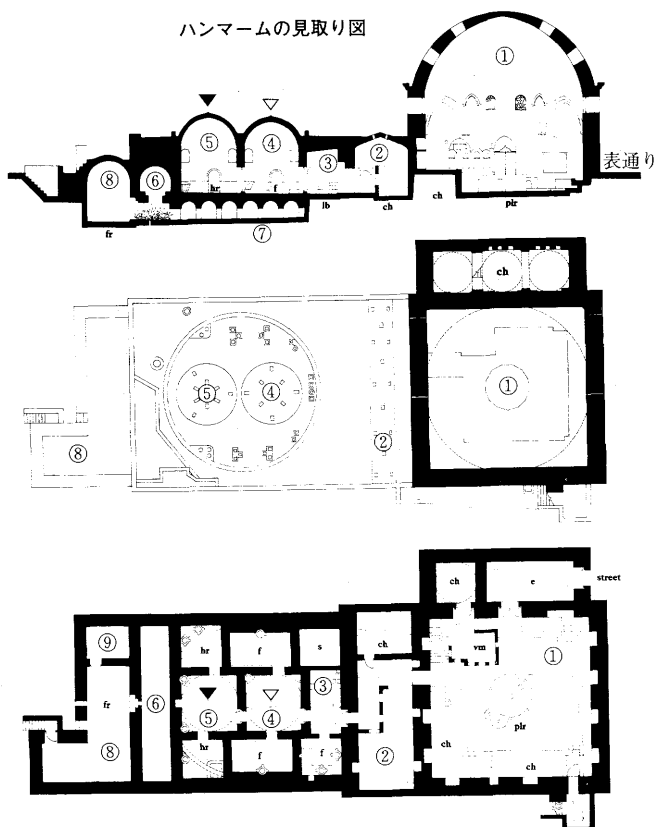
ハンマームの内部。床は石を敷き詰めてあり、湯気が立ちこめている。

ックを受けた。ぼくはこれが自分の垢ではなくて、キースのほうにたまっている垢が出てくるのではないか疑っている。しかし、ほこりっぽいサナアのこと、けっこう垢がたまっているのかもしれない。

いちばん奥がスチーム・バスの部屋である（二五七ページ図の▼印）。この部屋に入ると、蒸気がもうもうとしていて、目になれるまではよく見えない。天井に何カ所か小さな明かりとりの窓があるので、そこから洩れてくる光が何本かの明るい筋になって湯気の中に浮かび上がっている。この部屋ではなるべく多くの汗をかくことが目的となる。床の上にじかに腹ばいになると一分もすれば、お腹が焼けそうになってくる。下はかまどである。壁ぎわの石のベンチに座って壁にもたれ、じっとしている人もいる。壁も結構熱い。ある程度汗をかいたら、部屋の隅にある水がめのところに行つて頭から水をかけてもらう。それで出てもいいし、もう一度汗をかいてもいい。

それくらいではあきたらない若者は、汗をかくために腕立て伏せや腹筋運動を始める。金曜日のハンマームでは、このいちばん熱い部屋でジャンビア・ダンスの練習が始まることもしばしばである。もちろんジャンビアは持たないが、狭い部屋の中で人々が輪になってぐるぐる回りながらステップするのである。数分で人々の熱気も加わって汗がだらだら出てくる。ぼくも、何度かここでステップを練習した。家の中でジャンビア・ダンスの練習をしているイ

ハンマームの見取り図



(サナアのハンマーム・ミーダーン)

- ①入口ホール (中央には水をはったプールがある) ②脱衣場
 ③トイレ ④洗い場 ⑤蒸気室 ⑥ボイラー ⑦熱供給路
 ⑧かまど ⑨燃料倉庫

(出所) Sana'a, p. 513.

エメン人を見たことがないので、どうやらジャンビア・ダンスの練習はハンマームでするようだ。田舎の人はサナアのジャンビア・ダンスはなよなよしていて、他の地方に比べてテンポが遅いと言うが、それでも、ぼくにとつては十分ハードで、かなりの汗を流せるのである。

水をかぶって最初の部屋で汗がひくまで涼みがてら身体を洗う。そして脱衣所に戻る。脱衣所では湯上がり用の腰巻にはきかえてしばらく涼む（ハンマームに行くには、腰巻を二枚持つていくのが「通」である）。

この脱衣所でマッサージもしてくれる。コイン式のマッサージ機ではない。腹ばいになった客の上に男が馬乗りになって、身体をボキボキいわせるかなり荒っぽいマッサージだが、確かに筋肉はほぐれるようだ。ここで湯上がりの礼拝をしているおじいさんもよく見かける。せっかく身体を净めたのだから、まず一番にするのは礼拝というわけだ。

さて、着替えてお金を払い（垢こすり代、マッサージ代は別料金である）、足を水で洗って外に出る。このとき身体のだの部分も外気に直接触れさせないように注意しなければならない。毛穴が完全に開ききっているので、乾燥している空気に触れるといっぺんで風邪をひく。だから昼日なか、頭と顔のほとんどをターバンでぐるぐる巻きにし、首にも襟巻のようにターバンを巻き付けて歩いている人がいたら、それはハンマーム帰りの人である。頭に巻いているのがバスタオルであれば、それは日本人かもしれない。

ハンマーム上がりは、喉が乾く。しかしここで水を飲んでは台無しである。家に帰るまで辛抱する。カートをおいしく噛むために金曜日のハンマームはあるのだ。冷たいビールもいいと思うが、ここはイエメンである。

カート・パーティー 金曜日のカート・パーティーは、いつもより何となく晴れやかな気分の集まりである。親戚が集まるにしても普段よりも大人数が長老格の

人の家に集まり、同じ家で女たちも久しぶりの再会を喜ぶ。子供たちもイトコどうしがたくさんではしゃいでいる。平日より晴れがましい雰囲気とするのは、金曜日にはモスク用にみんなが一張羅を着るからだろう。

ホストがかなり広範囲の知人を呼んだときは、集まった者どうしが初対面の場合も多くどことなくよそ行きで、格式張った雰囲気になる場合も多い。いずれにせよ、金曜日のカート・パーティーは社会的な結びつきを維持し、強め、拡大する重要な儀式としての色合いが濃い。また、われわれ外国人が金曜日のカート・パーティーに招待されたなら、それはわれわれをメイングストとして特別にセッティングされたカートである場合も多い。これは名誉なことである。金曜日の午前中のカート・スークは、だからいつにもまして大にぎわいである。この日に結婚披露宴などをする家では、何千リヤル分ものカートを買うことがある。そうでなくても金曜日はいつもより良いカートを噛みたいと思う人も多いし、普段は噛まないが今日はおじさんの



サナア旧市街のカート・スーク。にぎわうのは1時半までである。



カート摘み作業。この作業では木を痛めずに若芽を摘むための熟練を要する。

家に親戚一同が集まるので嘸まなくちゃならないという人もいる。カート屋のほうでも今日はいつもより多めに仕入れ、一儲けをたくらんでいる。

サナアの市内にはいくつかのカート・スークがある。いちばん古いのは旧市街の塩スークの隣にあるカート・スーク。生粋のサナアっ子はここでカートを買うが、他よりちょっと高いと言われている。消費者に近いところまで運ぶ手間賃である。他のスークは町の周辺にあり、車がないと買いに行くのが不便である。

カートは生鮮食品なので朝摘みが理想である。その日の朝早く田舎の畑で摘まれ、トラックでサナア目指して運ばれてくる。南方面から来るカートはタイズ道路の「ビール・オベイド」スーク、西のほうから来るカートはホデイダ道路の「アスル」スーク、どちらもサナアの町外れである。北西方面からのカートはワーディー・ダハル道路を少し町外れまで行ったところ、北東方面からのカートはヌクム山の麓のスーク、といった具合に少しでも産地に近いところに客が出かけるのである。

さらにカート畑のある地方のスークにまで自分で足を伸ばせば、品質が良いカートを安く手に入れることができる。一度わが家でパーティーをしたとき、ぼくはサナアから五〇キロメートルほど西にある「スーク・アマン」まで、朝のうちに çık かけて行ったことがある。良いカートを少しでも安く買うために熱意を注ぐイエメン人は、賢い消費者の鑑である。



郊外のカート・スーク。畑からカートを積んできたワゴン車の荷台がそのまま店になる。鮮度の良さが売りものである。

さて、十分に品定めをして気に入ったカートを一抱え買い込んだら、透明のビニールの風呂敷に大切にくるんで風通しの良い日陰に保管する。カートは生ものである。葉っぱを乾燥させてしまったら、味も香りも歯ごたえもなくなってしまう。男たちがカートを大切に小脇に抱えて家に帰るさまは、ちょうど日本でお花の稽古帰りの女性たちが教材の花を持ち帰る姿によく似ている。こういうときの男たちは、カートが早く噛みたくて昼の礼拝や昼食の間中、気もそぞろであるにちがいない。

親戚が叔父さんの家に集まるような場合には、昼食も一緒にする。そして食後に別室で紅茶を一杯飲んで、おもむろにカートが始まる。女性たちは男たちのために水パイプの用意などを整えてやってから、自分たちの食事の番になる。

カートを噛む部屋に入って自分の座る場所を決める

と、皆がそれぞれ持ち寄ったカートをビニール風呂敷から取り出す。

「どうだい、いいカートだろ」

「ほほう、高かったろうな」

「いくらだと思う」

「五〇〇リヤル」

「そう思うだろ、これが向こうの言い値が四五〇、値切って四〇〇だよ」

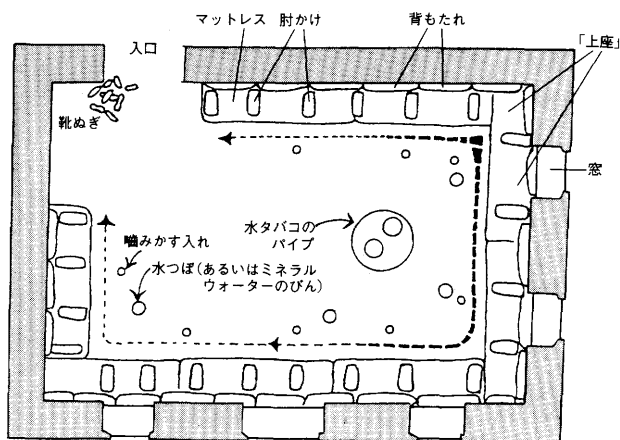
「どこで？」

「アスルだよ」

「そうか、やっぱりアスルまで行くべきだったなあ」

などというはしゃいだ会話があちこちで交わされ、自慢のカートの一枝をイトコや親友に分けてやる。この時わざわざ持つて行ったり、手渡しで回したりしない。相手の足元めがけて投げ、もらった人は自分の分をお札に投げ返すので、部屋中でカートの枝が乱れ飛ぶ。ホストの家の子供たちは、カートと一緒に飲むミネラル・ウォーターのプラスチック瓶やコーラの瓶をそれぞれの客に配りながら挨拶をしている。気前のいい叔父さんなら、ここでお小遣いの数リヤルをくれることもある。

そして、やがてあちらこちらでもぐもぐ始まるのである。このころ、外からのお客さんも次



カート・パーティーの場。点線の太さは着座位置の重要度を表わす。(Qat in Yemen, p. 131)

々とやってくる。やってくると入口で全員に挨拶した後、一人ひとりと隅から握手して回り、先客の間に入り込むので先客は右や左に詰めてやる。だから最初の三十分くらいは結構忙しい。人々は絨毯を敷き詰めた床の上に壁にもたれて座る。壁に沿ってぐるりとコの字型にマットレスが敷かれ、その上に幅八〇センチメートルくらいの、絨毯か毛布が敷いてありそこに座るのである。各自の間には直方体の形をした枕の親分のようなものへマドカーがある。これが肘掛けである。壁には、ちようど座った人の脇の高さの背もたれがこれまた、壁に沿ってぐるっとめぐらしてある。カートを噛むときは、左肘を肘掛けに乗せ、背中では壁にもたせてゆったりと座ることに決まっている。右手はカートの葉をしごいたり、

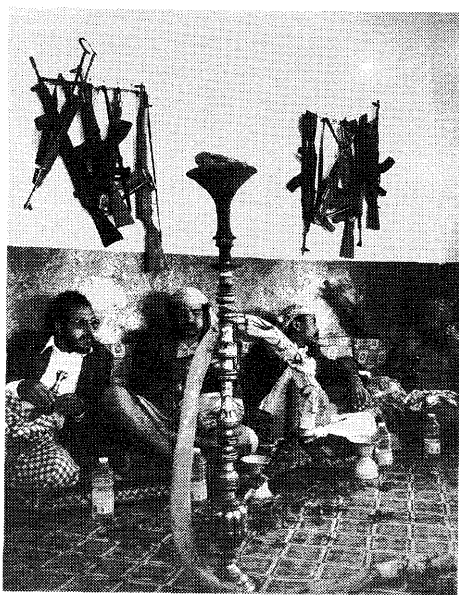
コーラを飲んだり、タバコをすったりするために自由に動くようになっていた。そしてみんな例外なく左側に傾くので、狭いところでもかなり多くの人が座れる。なかなかの生活の知恵である。満員のカーットの部屋では、だから部屋の入口からずらっと倒れたドミノのように、斜めになった人間が壁に沿って続いており、一周して入口に戻るようになる。

このときの座り方のコツは、右足を立て膝にして膝頭に右手を載せ、左足を右足の下に畳み込むことである。これで、一人当たりのスペースはぐっと小さくて済む。ただし、エチケツトがある。ふだんズボンをはいているイエメン人でも、カートのときは腰巻きを身につけるが、下着が人に見えないように腰巻きの前の部分をぴんと張っておくことが一つ。もう一つのエチケツトは左足の裏を人に向けないこと。足の裏を人に向けるのはたいへん無礼なことだからである。それ以外は、別にカート噛みの作法はない。ゆっくりとくつろぎ、おしゃべりを楽しめばよい。

噛み始めて三十分くらい経ち、おおよそのメンバーが揃ったところ（金曜のカート・パーティーでは参加者が二〇〜三〇人になることも珍しくない）、ぼちぼちカートがその効果を発揮し始める。

カートの話題

噛み始めてしばらくの間は、葉っぱを噛みくだいて片一方のほっぺたに溜めていくのに忙しい。カートの柔らかい若芽を噛むと、ほろ苦いエキスが口の中に浸み出してくる。このエキスを水を水やコーラとともに飲み下し、葉っぱの残骸は頬の中



田舎のカート・パーティー。壁にかかっているのは各自が持ってきたライフフルである。中央は水タバコ。

に溜めていく。慣れないうちはこれも一緒に飲み込んでしまい、お腹をこわすはめになる。

新しい葉っぱは、自分の膝の間に大切に抱え込まれたカートの束から一枚一枚ちぎられ、次から次へと口の中に供給される。このときも必要な分だけビニールの包みから取り出し、残りは乾燥しないように十分気を使

って包んでおく。時間の経過とともに頬の中に放り込まれるカートはどんどん増えていき、外から見るとこぶがピンポン玉大からビリヤードの球、野球のボールへと膨張していき、人によつてはソフトボールくらいになることも珍しくない。このとき口の中に入っている葉っぱの枚数は二〇〇〜三〇〇枚は下らない。

カートの木は一見お茶の木

ような枝振りである。また、葉っぱは柿のようでもある。九〇センチから一メートルほどのカーットの枝を葉っぱごと買ってきたとしても、実際に噛むのは上から半分くらいまでの柔らかい葉だけで、下半分の葉は固くて噛めないし噛んでもエキスは出てこない。捨てるしかないのだ。そこで、めいめいの席の前にはカーットの噛みさしが山積みになっていく。

カーットのこぶがピンポン玉くらいになったところから、おしゃべりの花が咲く。ほろ酔い加減である。話題は次から次へと展開し、それぞれが一人前の評論家気取りである。三〇人もいるようなパーティーだと、あちらこちらでいくつかのグループが別々の話題について話し、議論が沸騰すると大声になるので、部屋は喧噪に包まれる。しかしみんな幸せな気分なので、喧嘩になることはまずない。酒とカーットの最大の違いはここにあるかもしれない。

最初のうちは、町の噂話や政治家の噂話、郷里の話などが中心であり、情報交換の機能を果たしている。噛み始めて一時間ほど経ち、カーットの覚醒作用がピークになるころには今の政治のあり方が正しいかどうか、革命の精神はイスラムに反するものかどうか、といったかなりシリ阿斯な問題に話題が移っていく。イスラムはいつでも形を変えながら、カートの話題の核心に横たわっている。法学に関することなら宗教知識のある者がいない者に、昔と今のイスラムのあり方の比較なら年長者が若い者に教える。知識を伝達する機能もカート・パーティーには欠かせない。

一つの議論が延々と続くことはあまりない。たいていの議論は、それまで黙って若い者の議論を聞いていた長老格の人が一言重みのある発言をして一件落着となり、別の話題に移っていく。このとき判断の基準になるのは、コーランの一節であることが多い。残りの者は、その意見に不満があってもその場で反論して蒸し返すようなことはない。

ある金曜日の話題の一つは「札拝をしたがらない子供に、札拝を強要すべきか」というものであった。問題を提起したのは、四、五歳の男の子を持つ父親であった。日常生活で日々彼らの頭を悩ましている問題について、親類の者の意見を聞いてみたかったのである。

「無理強いすべきではない、親は道を示してやるべきだが、自分で判断できるようにするのが待つべきである」とアハマド、

「札拝するように説得すべきであり、それでも言うことを聞かなければ体罰を加えてもさせるべきである」とムハンマド、

「体罰はできるだけ避けるほうが良い、札拝したらお小遣いをやるようにして仕向けても良い」とアブドゥッラー。いろいろな考え方があるものだということがわかって、ぼくにとっても興味深い議論だった。

また同じ日の別の話題は「魔術はあるか」であった。マウルの近くの町に水晶玉で占いをするおばあさんがいると言う。車を盗まれた人が占ってもらったら、言うとおりのところで見つ

かったという話をアリーがする。「そんなことはありえない、超自然の力など人間に操ることはできないのだ」とアミン、「そういうこともあるかもしれないが、イスラムでは占いやハラム（禁じられていること）である。われわれはそうしたものに近づかないほうがよい」と長老が言った。アリーは占いが当たった別の例を話したそうだったが、そう言われたので、それ以上言うのをやめた。若い者だけの場だったら、もっとこの話題が展開したかもしれない。

話題はしばしば国際政治にまで展開する。基本的な認識は、イスラエルが悪者で、それを支援するアメリカも悪者。また、ソ連はアラブにとって友人であったが、アフガニスタン侵攻以来イスラムの敵として悪者になった（これは一九八五年から八六年当時の認識である）。

世界で最も純真なイスラム教徒は誰か、という話題では、一九八六年当時は、まず決まって「アフガニスタン人」という答で一致した。経済力、技術力、軍事力で圧倒的であるソ連軍に対してゲリラ戦で対抗していたアフガニスタンの人々の姿は（頻繁に流されるニュースや金曜礼拝での説教の影響もあって）、多くのイエメン人の共感を呼んでいたものである。なかにはアフガニスタンに義勇兵として出かけたという者もいた。

パレスチナ問題は、必ず一度は話題になる。イエメンには、PLOの難民キャンプもあり、アラファト議長もよくサナアを訪れる。同じアラブ人、イスラム教徒として彼らに支援を送るのは義務である。実際にイエメンから義勇兵が何人も出かけており、戦死者は英雄である。し

かし、地理的に隔たっていることもあって、イエメンの日常からはやや遠い出来事として語られている感じがした。

近代化と伝統をめぐる議論もよく話題になる。途上国ならどこでもそうであるように、社会が進歩し開発が進む一方で、伝統が損なわれていく現実をどのように評価し、どのように対応すべきなのか、人々は日々ジレンマを感じている。教育のこと、医療のこと、衛生のこと、女の子を学校にやるべきか、あるいは、父親が病気なのだがイエメンで手術をすべきか、それともエジプトに行くべきか、はたまた西ドイツまで行くべきかといった相談ごと話題になる。

カートがイエメンの発展の妨げになっているという意見は根強く、カートを噛みながら進歩について語るのは滑稽だという人もいる。特に唯一の外貨獲得源であったコーヒー畑がカート畑に取ってかわられることによる経済的ダメージはしばしば強調される。しかしカート・パーティーの社会的機能には他に見られないユニークなものがある。カート・パーティーはイエメン社会の社交場であり、イスラム教育の場であり、悩みごと相談所であり、世代間ギャップの調整の場であり、世界情勢の講義の場であり、そして互いの人間性を評価しあう場なのである。